

Ⅲ. アクティブ・ラーニングの普及

1. AP テーマ I 「アクティブ・ラーニング」 シンポジウム

1. 概要

本シンポジウムは、徳島大学における教養教育科目及び専門科目におけるアクティブ・ラーニングの実践事例を共有し、その成果と課題について議論を行うことで学内への普及につなげること、及び AP テーマ I 採択校代表 3 校の取組について情報共有し、成果の発信を行うと共に、今後の大学教育改革の方向性とそのための指針について協議することを目指し、平成 29 年度より新たな企画として実施された。徳島大学総合教育センター教育改革推進部門の上田勇仁特任助教が司会を務め、同部門の新原将義助教、京都光華女子大学の酒井浩二教授、徳山大学の庄司一也特任講師・寺田篤史特任講師の 3 組によって、それぞれの大学におけるアクティブ・ラーニングの普及の取組が紹介された後、筑波大学の茂呂雄二教授による指定討論を行い、会場を交えたディスカッションを実施した。

以下ではまず、プログラムの主旨と各提題者による提題の内容を記すことでプログラムの詳細を示し、その後、実際に行われたシンポジウムの様子を報告する。

2. プログラムの詳細

2.1 本シンポジウムの主旨

徳島大学は平成 26 年（2014 年）に、「学生と教員が共に成長する『SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～』」を中心とした取組を提案し、文部科学省大学教育再生加速プログラム（AP）のテーマ I 「アクティブ・ラーニング」に採択された。平成 26 年度を実施準備の期間とし、平成 27 年度から「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」を開講し、平成 29 年度には学部 1 年生全員の 1417 名が受講している。

また、平成 28 年度からは徳島大学は AP テーマ I 「アクティブ・ラーニング」のテーマ別幹事校となり、全国の 9 校の連携による成果の発信という新たな役目も担うこととなった。本 AP シンポジウムは、このテーマ別幹事校としての業務に伴い、これまで徳島大学の単独開催として行ってきた企画を、新たに AP テーマ I 採択校 9 校による共同開催としたものである。実際に行った企画のタイムテーブルは以下の通りである。

AP テーマ I 「アクティブ・ラーニング」シンポジウム開催第 1 年目となる今回は、徳島大学の他、同じく AP テーマ I 採択校である京都光華女子大学、及び徳山大学の計 3 校による取組の紹介を行うと共に、筑波大学の茂呂雄二教授より、学習・発達論の見地から、これまでの成果や今後の課題について意見を伺った。また、文部科学省の河本達毅改革支援第二係長より、AP の取組と質保証についてご講演をいただき、さらにフロアを交えた議論を行った。本報告では特に、各校の発表内容を概観し、指定討論及びフロアとの議論のなかで浮かび上がった論点について報告する。

時間	内 容	詳 細	担当者
13:00-13:05	開会挨拶		高石喜久
13:05-13:15	企画主旨		新原将義
13:15-14:30	話題提供	徳島大学の発表 京都光華女子大学の発表 徳山大学の発表	新原将義 酒井浩二 庄司一也・寺田篤史
14:30-15:00	指定討論	アクティブ・ラーニングの実践報告を受けて 成果・課題、議論の論点等	茂呂雄二
15:00-15:20	質疑応答	フロアとの議論	上田勇仁（司会）
15:30-16:00	講演	「大学教育再生加速プログラム（AP）と質保証～アクティブ・ラーニングに着目して～」	河本達毅 （文部科学省）
16:00-16:30	フリーディスカッション	講演内容、シンポジウム全体を振り返っての議論	新原将義・上田勇仁 （司会） 茂呂雄二 （コメンテーター）

2.2 各校の報告

徳島大学の取組 徳島大学の新原将義助教より、徳島大学の取組の概要及びこれまでの成果、今後の課題について発表が為された。発表のなかでは、理工学部電気電子システムコース「STEM 演習」や総合科学部「課題発見ゼミナール」といった授業事例が紹介されると共に、これまでの調査結果を用いた効果検証の経過が報告された。SIH 道場受講者に対するアンケートの結果からは、ラーニングスキルに関する学修成果については回答結果に大きな変化は見られないものの、学修の振り返りについては、積極的に取り組んだとする学生の割合が増加しており、一定の成果が見られること、及び全学調査の結果との比較では、SIH 道場実施前の結果よりも授業外学修時間に増加の傾向が見られることなどが示された。また、個人的な成果ではなく、コミュニティの変化を成果として捉える視点の必要性が指摘され、その指標として学内の学習スペースの稼働率などを調べるのが有用なのではという提案があった。

京都光華女子大学の取組 京都光華女子大学の酒井浩二教授より、京都光華女子大学の取組の概要及びこれまでの成果、今後の課題について発表が為された。発表のなかでは、ペアワークやクリッカーの活用を取り入れた授業の様子や、教室の改修、学修ステーションの活用といった環境デザインの取組、学生チューター制度による学年間の交流の活発化の事例などが報告された。また退学率や就職率、国家試験の合格率などを指標とした出口保証の取組についても共有が為された他、今後の課題として、専門課程におけるアクティブ・ラーニングの推進、ベストプラクティスの全学的共有、4年間の個別学生のアセスメントの体系化などが挙げられた。

徳山大学の取組 徳山大学の庄司一也特任講師，寺田篤史特任講師より，徳山大学の取組の概要及びこれまでの成果，今後の課題について発表が為された。発表のなかでは，授業の評価に関する独自の指標である BAL（Barometer of Active Learning）値を用いた授業評価システムや，地域課題によるアクティブ・ラーニングの体験を目的とした「地域ゼミ」の授業事例，「課題対応力評価コモンルーブリック」を用いた学習成果の評価の仕組みについて紹介があった。また学内専任教員を対象とした意識調査の結果から，教員がアクティブ・ラーニング導入を負担に感じていることや，アクティブ・ラーニング推進自体には否定的ではないものの全面的なアクティブ・ラーニング推進に対しては懐疑的であるとする意見などが紹介された。

2.3 指定討論

指定討論として，筑波大学の茂呂雄二教授より，学習・発達論の見地から 3 校の取組について論点を整理いただいた。発表では，古典的な能力観から新しい学力についての議論を含めたこれまでの学習・発達論の流れを共有し，近年の学習科学で着目されている「遊び」を通じた発達という考え方について解説が為されたうえで，3 校の取組において学生の遊びによる発達の過程をどのように生起させているのか，またそうした機会をどのように増やしていけるのかという論点が指摘された。

また，アクティブ・ラーニングが世界的な新自由主義の流行に伴うグローバル化の中で注目されてきたという流れが解説されたうえで，3 校の取組の中には新自由主義的な流れとは相反する要素が数多くあり，そうした要素を確保することの学習的・発達の重要性について指摘が為された。具体的には，徳島大学の「教員も学習者である」と捉える視点や教員の学習を支援する取組，徳山大学のオーセンティックな地域課題を題材とした授業の事例，先輩と後輩との関係性を活用した京都光華女子大学の支援システムなどが挙げられ，新自由主義的アレンジメントのなかで学習の本質を取り戻すための取組として高く評価された。そのうえで，アクティブ・ラーニングを普及していく上では，教員の負担についてエフォート管理をしながら考えていくことも必要なのではないかという論点が挙げられた。

2.4 講演

文部科学省の河本達毅改革支援第二係長より，AP の取組と質保証についてご講演をいただいた。講演では，高等教育の質保証の考え方について解説がされた後，これまでの制度改革の内容や，アドミッション・ポリシー，カリキュラム・ポリシー，ディプロマ・ポリシーを起点とした内部質保証の方法について紹介があった。

さらに，学士課程における学修成果を捉える上での参考指針として，中教審がこれまで提案してきた生きる力や学士力，OECD の提案するキー・コンピテンシー，経済産業省の提案する社会人基礎力などの諸概念について解説と整理が為されたあと，こうした能力の育成につなげるために可能なアプローチとして，アクティブ・ラーニングの観点から，目標設

定、評価、施設・設備、授業手法の4種のアプローチが考えられるという説明が行われた。

2.5 フリーディスカッション

フリーディスカッションでは、フロアから提出された質問の内容をもとに、登壇者とフロアとの間で議論が行われた。まず、アクティブ・ラーニングを全学的に推進する上での設備の整備やその利用状況について質問が為された。この点について新原助教より、発表資料をもとに図書館の学習スペースの利用件数の推移について紹介が為された。酒井教授からは、京都光華女子大学における「学習ステーション」と各学科に設置されている「コモンズ」の取組についてそれぞれ紹介が為された。また徳山大学からは、ラーニングコモンズの設置に際する学内の諸施設との位置関係の設計の重要性が指摘された。

このほか、これまでの全学的な取組のなかで困難であった課題について質問が為された。これに対して酒井教授より、京都光華女子大学では、国家資格の取得を目指す学部と多様な進路の可能性を含有する学部とでは取組の内容が大きく異なるため、アクティブ・ラーニングの普及による各学部のメリットを示しながら協力を求めていく必要があるとの意見が述べられた。

3. まとめ

今年度より新たに実施した「AP テーマ I アクティブ・ラーニングシンポジウム」は、AP テーマ I 採択校 9 校による共同開催という新たな試みであり、採択校 9 校の取組の成果の共有及び 9 校連携による情報発信の取組として貴重な機会であったといえる。一方で、今回は首都圏や都市部から離れた地方での開催ということもあり、参加者が当初の想定よりも少なかったことは否めない。AP テーマ I の情報発信の機能を強化するためには、より多くの参加者を集めることが今後の課題であるといえ、そのためには開催地の変更などの工夫が必要であると考えている。

また、本シンポジウムでは指定討論として、従来から高等教育論になじみのある人材ではなく、教育・学習心理学の専門家をお招きし、学習・発達論という新たな観点からの議論を試みた。その結果、従来からの議論とは異なる観点からの議論が生起し、各校の取組の成果や今後の課題がより明確になったといえる。今後のシンポジウムにおいても、多様な分野の専門家による指摘を受けながら、各校の取組の成果や課題について様々な観点から再考する機会が重要になっていくといえよう。

2. アクティブ・ラーニング学内調査報告

アクティブ・ラーニングを個々の教員の専門科目に普及していくために、さまざまな専門分野におけるアクティブ・ラーニングの取り組みを調査し、教員間で共有できる仕組みの構築を行うことを目的としている。平成 29 年度は新たに 10 件の事例カードを追加し、合計 44 件の事例について、学内教職員が web 上で共有できるように公開した。

1) 学生の学習を促進する授業事例カードリスト

No	分野	事例名	教育的意図	所要時間(分)	クラスサイズ	担当教員			授業名
						氏名	大学	所属	
SCM-00	理学 <small>(自然科学)</small>	小道具や学生とのやり取りで注意喚起する	注意喚起・動機づけ	0	中	古屋 玲	徳島大学	教養教育院	現代天文学への招待
SCM-10	理学 <small>(自然科学)</small>	レクチャーとペアによる教え合い・学び合い	理解促進	15~25	中	神原暢久	徳島工業大学	教養学部	微分積分1.2・線形代数1.2
SCM-11	理学 <small>(自然科学)</small>	レポートの質を高めるためのひと工夫	理解促進	15	中	古屋 玲	徳島大学	教養教育院	現代天文学への招待
SCM-12	理学 <small>(自然科学)</small>	スマートフォンで学生の理解を把握する	理解促進	15	中	斎藤隆仁	徳島大学	教養教育院	基礎物理学Ⅱ・物理学概論
SCM-20	理学 <small>(自然科学)</small>	ミニ実験を含めた理論解説	動機づけ	25	中	渡部 稔	徳島大学	教養教育院	基礎生物学
SCM-30	理学 <small>(自然科学)</small>	演示実験を含めた理論解説	動機づけ	35	中	渡部 稔	徳島大学	教養教育院	基礎生物学
SCL-00	理学 <small>(自然科学)</small>	実物を用いて複眼的な理解を促進する	動機づけ・理解促進	3	大	佐藤高則	徳島大学	総合科学部	ミルクの科学
SCL-10	理学 <small>(自然科学)</small>	復習項目の提示と授業冒頭の確認テスト	理解促進	10	大	向井理恵	徳島大学	生命環境学	基礎食品化学
SCL-20	理学 <small>(自然科学)</small>	ペア・グループによる課題演習	理解促進・動機づけ	25	大	佐藤高則	徳島大学	総合科学部	環境とバイオテクノロジー
ENS-00	工学	授業内容に関連する実物を見せる	注意喚起・動機づけ	2	小	岡本敏弘	徳島大学	工学部	光デバイス
ENS-10	工学	授業の冒頭で実施する小テスト	理解促進・予習促進	16	小	岡本敏弘	徳島大学	工学部	光デバイス
ENS-30	工学	ペア学習と学生による解説	理解促進・予習促進	30	小	押村美幸	徳島大学	理工学部	有機化学Ⅴ
ENM-00	工学	Moodleを活用した理解度の確認	注意喚起・知識定着	3~5	中	伊藤桃代	徳島大学	理工学部	プログラミング入門及び演習
ENM-10	工学	授業の冒頭で予習ノートをチェックする	予習促進・理解促進	10	中	水科晴樹	徳島大学	工学部	電子回路
ENM-11	工学	授業の最後に小テストを実施する	理解促進・注意喚起	10	中	水口仁志	徳島大学	理工学部	機器分析化学
ENM-50	工学	学生の板書する解答を活用した演習科目	理解促進・予習促進	80	中	吉田 健	徳島大学	工学部	物質機能化学演習
ENL-10	工学	授業の最後に実施する課題演習	知識定着	15~20	大	西出 俊	徳島大学	工学部	グラフ理論
ENL-20	工学	理論解説と直後の課題演習	知識定着・理解促進	20	大	犬飼宗弘	徳島大学	理工学部	基礎物理学・力学概論
ENL-30	工学	反転授業(知識定着のための課題演習)	知識定着・予習促進	40	大	森賢俊広	徳島大学	工学部	材料物性
ENL-90	工学	ジグソー(協同学習の一技法)	理解促進・複眼的思考促進	90	大	上月康則	徳島大学	理工学部	環境を考える
SOS-00	社会科学	予習シートの事前配布と小テスト	予習促進	5	小	吉田 博	徳島大学	総合教育センター	大学教育と学び方入門
SOS-20	社会科学	パネルディスカッション	複眼的思考促進	20~40	小	吉田 博	徳島大学	総合教育センター	大学教育と学び方入門
SOS-21	社会科学	マイクロレポート	複眼的思考促進	25	小	小田切康彦	徳島大学	総合科学部	公共政策学Ⅱ
SOM-00	社会科学	カードを用いてクラス全体の意見を把握する	注意喚起	1	中	金西計英	徳島大学	総合教育センター	情報メディアと教育
SOM-10	社会科学	グループメンバーへのフィードバック	動機づけ・振り返り	10	中	金西計英	徳島大学	総合教育センター	情報メディアと教育
SOM-20	社会科学	コースの中間期に実施する振り返り	振り返り	20	中	金西計英	徳島大学	総合教育センター	情報メディアと教育
SOM-30	社会科学	マインドマップを用いた概念の整理	理解促進・振り返り	30	中	小田切康彦	徳島大学	総合科学部	公共政策学Ⅰ
SOM-90	社会科学	グループワーク・プレゼン	複眼的思考促進・理解促進	30+90	中	小田切康彦	徳島大学	総合科学部	公共政策学Ⅰ
SOL-00	社会科学	大循環による振り返り	振り返り・動機づけ	5	大	金西計英	徳島大学	総合教育センター	情報メディアと教育
SOL-50	社会科学	スモールグループディスカッション	複眼的思考促進	60	大	土屋 敦	徳島大学	総合科学部	生命倫理と現代社会Ⅰ
SOL-51	社会科学	反転授業・プレゼン・ディスカッション	複眼的思考促進・予習促進	70	大	金西計英	徳島大学	総合教育センター	情報メディアと教育
MES-10	医療	予習課題を学生に説明させる	理解促進・予習促進	10	小	櫻井信之	徳島大学	総合科学部	基礎物理学実験
MEM-00	医療	クlickerを使用した発問とフィードバック	注意喚起・理解促進	3~5	中	安階 晋	徳島大学	歯学部	歯科臨床実習
MEM-10	医療	事例について学生同士で話し合う	理解促進	18	中	橋本浩子	徳島大学	医学部	小児援助論
MEM-20	医療	解説の後にグループで具体例を考えさせる	理解促進・注意喚起	25	中	中尾玲子	徳島大学	医学部	応用栄養学
MEM-30	医療	最新論文を活用した解説と小レポート	動機づけ・理解促進	40	中	近久幸子	徳島大学	医学部	生体の統合機能
MEM-50	医療	グループで体験学習を行う	理解促進・複眼的思考促進	60	中	岡久玲子	徳島大学	医学部	産業保健・看護論
MEM-51	医療	TBL (Team Based Learning)	理解促進・予習促進	60	中	大倉一夫	徳島大学	歯学部	歯科補綴学(2)A
MEL-00	医療	予習課題のミニプレゼンテーション	理解促進	3~5	大	米村重信	徳島大学	医学部	基礎生物学
MEL-10	医療	動機づけを促す講義途中の小レポート	注意喚起・動機づけ	10	大	松本高広	徳島大学	医学部	実験動物学・放射線学概論
MEL-11	医療	授業の最後に実施する理解度テスト	理解促進	15	大	江川麻理子	徳島大学	医学部	ぶどう膜・視神経疾患
LAM-30	語学	英語の歌を教材として活用する	動機づけ	30	中	宮田政徳	徳島大学	総合教育センター	主題別英語
LAM-50	語学	グループで予習課題を話し合わせる	理解促進・予習促進	55	中	服部恒太	徳島大学	総合科学部	主題別英語
OTS-90	イノベーション	デザイン思考の体験	デザイン思考	90×4	小	北岡和義	徳島大学	教養教育院	イノベーション思考入門

2) 学生の学習を促進する授業事例カード 例

◆ジグソー (協同学習の一技法)		事例No.ENL-90
徳島大学 理工学部 上月康則 教員 理工学部専門科目「環境を考える」 2017年		
目的 教育的意図	◆Key Words< 理解促進 複眼的思考促進 > 正解が1つではないテーマに対して、 各自が考え、複数の学生と学習内容を共有 し、テーマに関する まとめ (振り向きまたはテストなど) を行うことで、 深い理解と広い視点からの理解 を促す。	
分野	工学系 (他分野でも応用可能)	
クラスサイズ	大(70名以上)	
所要時間	90分 内訳: <10分> ホームグループのグループ分け・各自の課題の分担決め (前の授業の最後に実施) <30分> エキスパートグループによる予習内容・課題の共有 <50分> ホームグループにて、内容の共有、書テスト、振り返りシートの作成	
学生の事前学習	ホームグループでの各自の担当課題 (今回の事例では、論文や資料を参考にしてA4用紙一枚程度のレポート課題を解く。)	
評価方法	ホームグループで行う小テスト、振り返りシート、作成成果物 (ポスター、フィルムの評価や、最終講義でのテスト)。	
準備物	テーマの設定、各テーマに対して4つの異なる課題または資料を準備する。	
実施のポイント	◆ジグソー法や各活動の意図を学生に説明しておくことで、効果を高めることができる。 ◆学生が分担して取り組む課題や事前学習は、テーマや最終的なまとめ (振り返り、小テストなど) との関連があり、各自が学習してきた内容を共有する必要があるものを用意する。 ◆広い視野の修得、学習内容の社会実用性を理解するために、外部講師による講義をテーマごとに実施することができる。	
メリット	□学生がグループ内で異なる課題に取り組み、メンバーと共有することで、責任をもって学習に取り組むことができる。 □学生は同じテーマの下で、それぞれが異なる情報をもとに議論を行うため、幅広い視点から考察することができる。	
デメリット	■テーマ設定や課題の準備などを十分に検討して授業を設計する必要がある。 ■グループでの議論をケアするために、複数のスタッフが必要となる。	
学生の反応	大人数のクラスで実施しているため、知らない学生同士によるグループが作られており、グループ内では緊張感をもって学習に取り組むことができていた。また、授業の回数をこなすごとに、学生は事前学習やグループでの共有に集中して取り組みことができるようになってきている一方で、慣れによる気の緩みも一部にみられた。	

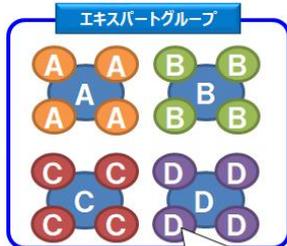
事例カード表面 (事例の概要)

◆ジグソー (協同学習の一技法)

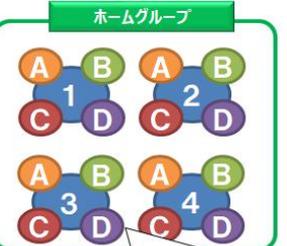
1. **学生4~6名で1組**になるようにグループ分けを行う (ホームグループという)。
2. ホームグループで、1つのテーマに関する**4つの異なる資料、または課題** (A, B, C, Dとする) を各学生が担当し、学習する (今回の事例では、ここまでを授業終了時に行い、各自が授業外でA4用紙一枚程度のレポート課題を解く)。
3. **同じ資料を学習した学生同士でグループ**を作る (エキスパートグループ) という。
4. エキスパートグループ内で、それぞれが**学習した内容を共有**し、さらに理解を深める。
5. ホームグループに戻り、エキスパートグループで**それぞれが理解した内容を共有し、初めに与えられたテーマに関するまとめ**を行う。 (今回の事例では、グループで1つの小テストを解き、テーマに関する振り返りシートを作成する。)



ホームグループ



エキスパートグループ



ホームグループ

前の授業の最後にグループ分けを行い、各グループ内で予習課題の分担を行う。

次の授業までに、各自で課題に取り組む。

授業開始時には、エキスパートグループで看直し、各自が学習した内容を共有する。

エキスパートグループで共有した内容を、他のメンバーに共有し、小テストを解き、テーマに関する学習のまとめ (振り返りシート) を行う。



グループ分け・分担決め (約10分)



各自の課題の共有 (約30分)



小テストに取り組む・振り返りシートの作成 (約50分)

事例カード裏面 (事例の詳細)

3. FD プログラムの開発

3-1 スマートフォンを活用した FD

i. 目的

アクティブ・ラーニングを推進するために、「スマートフォンを活用した授業改善ワークショップ」を開催した。本ワークショップは 2017 年度から実施した新しい企画である。本ワークショップでは、昨今の大学における ICT 機器の導入事例を紹介し、授業改善の中で学生アンケートや理解度テストの重要性について解説した。また、全学的に導入されている Office365 のアプリケーション「Form」を使って授業の中で実施する予定のアンケートや小テストを開発した。

ii. 概要

■開催時期

平成 29 年 12 月 15 日（金）16：30～18：00

■会場

地域創生・国際交流会館共用室 301

■参加者

10 名

■研修の目標

- 1) 大学における ICT 機器の導入事例についての解説
- 2) 授業改善における学生アンケート・理解度テストの活用方法
- 3) Office365 のアプリケーション「Form」を使って授業の中で実施する予定のアンケートや小テストの開発

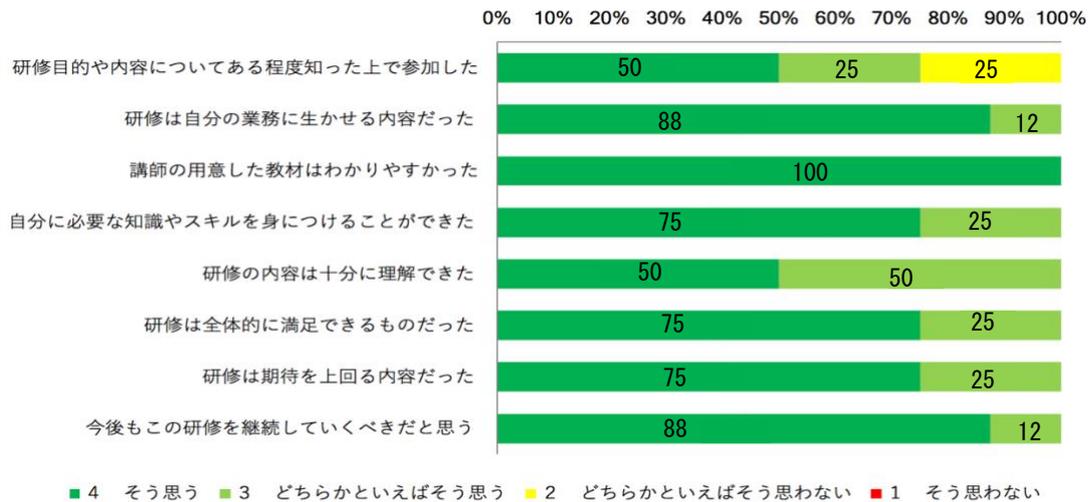
■担当講師

総合教育センター教育改革推進部門 特任助教 上田勇仁

iii. 成果・課題

アンケートから「研修は全体的に満足できるものだった」、「今後の研修を継続していくべきだと思う」などの項目について参加者全員が肯定的な回答を示した。ワークショップの中でのディスカッションにおいても日頃、紙のアンケートやクイズを実施しているが回収や採点についての負担が多く、今回紹介したアプリケーションを直ぐに取り入れたいという要望が多かった。マイナビが行った調査によると 90%以上の大学生がスマートフォンを所有しており、今後もコミュニケーションツールの中心にスマートフォンが位置づけられると考えられる（マイナビほか 2017）。学生にとってもスマートフォンを使ったアンケートや小テストの実施についての抵抗感は少なくなり、スマートフォンを活用したワークショップの要望が増えていくと想定される。

自由記述においては、「もう少し時間を長くとる。研修をシリーズ化する」「実技の時間がもう少し長かったらよかったです。」などの要望があり、ワークショップ実施時間内にアンケートや小テストを全て完成させることができなかつたことが考えられる。今後はワークの時間を一定時間確保する必要がある。また、本ワークショップを継続していくとともに、発展的な内容についても検討を進めていきたい。



本ワークショップ終了後のアンケート (n=8)

3

下の1~4の文は、次の図2中D~G付近のいずれかにおける代表的な植生観と人間活動について述べたものである。Eに該当するものを、下の1~4のうちから選べ。
平成29年センター試験地理A【知識】* (20点)



図 2

- 1. 広大な草原がみられ、砂漠化防止のための取組が行われている。
- 2. 広葉樹を主体とする森林で、甘味料の原料がとれる樹木がある。
- 3. 針葉樹を主体とする森林で、林業が盛んである。
- 4. 草原のなかに樹木が分布し、野生動物が観光資源になっている。

本ワークショップで示したクイズの例

【参考】 次の URL・QR コードからサンプルを確認できます。

URL: goo.gl/KPhW54



3-2 「AttracTube」実施報告

1) 概要

学生と教員が授業の方法や質の向上について議論することの可能な FD プログラムを開発するため、本年度より「AttracTube (アトラクチューブ)」と題して、学生が企画・運営・実施する学生参加型 FD を試行した。以下では、その背景、実施方法、ならびに成果の報告を行う。

2) 背景

AttracTube を企画した背景として、以下の 2 点が挙げられる。

第 1 の点は、近年様々な大学で「学生参画型 FD」あるいは「FD 活動」と呼ばれる実践が広がっていることである。対して徳島大学では、学生自身が企画・運営する FD はこれまで行われてこなかった。本企画にかかわった学生スタッフ 4 名のうち、特に本企画の立ち上げにかかわった学生スタッフ 2 名はこれまで、教育改革推進部門において学生アルバイトとして任用され、FD の運営補助業務に従事する中で次第に、こうした学生参画型 FD が徳島大学においても必要なのではないかと考えてきた。

第 2 の点は、質の高い授業事例を共有する必要性が高まっていることである。平成 28 年度の「学生の学修に関する実態調査 (Learning Life)」では、問 84「授業評価アンケート結果は授業改善に活用されていると思う」に対する肯定的な回答は、約 3 割という低い水準となった。こうした実態の背景として、学生が大学における授業の質に、全体として満足していない可能性が考えられる。実際に、学生スタッフからは、様々な場で同級生などから「大学における授業に満足していない」と主張する学生の声を耳にすることが多いと感じるといふ声が聞かれた。

一方で、学内において実施されている全ての授業が、学生からの評価が低い訳ではなく、学生から授業内の取組や教員の姿勢が高く評価されている授業も存在している。実際に、学生スタッフがこれまで受けてきた授業のなかにも、充実感をもって主体的に課題に取り組むことができ、その後の大学生活においても影響を受けたような授業が存在した。以上のような現状を鑑みると、学生から授業内での取組や教員の姿勢について高い評価を受けている授業事例について、教員・学生が意見交換することのできる取り組みが必要なのではないかと考えた。

3) 実施方法

以上の背景から、徳島大学において新しい学生参画型 FD を実施するにあたり、本企画ではすでに大学改革への学生参画を進めてきた「教育について考え提案する学生・教職員専門委員会」のもとに、新たなワーキンググループとして「授業デザイン発信ワーキンググループ」を設置し、このグループを中心に活動を進めることとした。本 WG には立ち上げ当初

から学生スタッフ 2 名が参加しており、その後さらに 2 名の学生が参加し、平成 29 年度は 4 名の学生委員と 1 名の教員によって運営を行った。

WG の活動は、基本的に以下の 2 つを目的とすることとした。

- ① 学生委員がこれまで受講した中で、質が高く有意義だったと考える授業を選定し、これを対象に、その授業における教員の取組が分かるような映像資料を作成する。
- ② ①で作成した映像資料を、学内の教員が視聴し、かつ映像資料の対象となった授業の実施者との教員が意見交換をしようという FD を、学生委員が主体となって企画・運営・実施する。

この結果、平成 29 年度には学生から推薦された 2 つの授業について映像資料を作成し、この映像をもとに 2 回の全学 FD を実施するに至った。実施の詳細は以下の通りである。

	日時	対象授業	会場
第 1 回	平成 29 年 11 月 28 日 16:30～17:30	青矢睦月准教授 「岩石と鉱物」	徳島大学附属図書館ラーニングコモンズ
第 2 回	平成 30 年 1 月 19 日 16:30～17:30	荒木秀夫教授 「行動調査研究プロジェクト」	カフェスペース

4) 成果と課題

第 1 回には学内から 15 名の参加者が、第 2 回には学内外から 16 名の参加者が参加し、活発な議論が為された。これまで、実際の授業事例についての学生にとっての意義についてやり取りする場はあまりなく、そうした機会を学生主導で創出した本企画は、一定程度の成功を収めたといえよう。





また、図書館のラーニングコモンズという実施場所の特徴から、第 2 回には通りがかった学外の図書館利用者が参加していた点も、興味深い点である。参加するには至らなかったが、実施中、教員の話や動画に足を止める学生も何名か見受けられ、こういった学生がさらに議論に参加しやすくする工夫が、今後の課題である。

他の課題として、学生委員の確保が挙げられる。本企画では、学生委員のなかに 1 名、趣味で動画の編集経験のある人材がいたため、この学生を中心に動画の編集作業を進めた。今後、こうした動画編集やイベントの運営に長けていたり、興味があるなどの学生を委員として集めることと同時に、こうした技術を他の学生委員にいかにか共有するかという点が課題となるであろう。また、今年度は教育改革推進部門が所有する PC だけでは動画編集が追い付かず、学生委員の私用の PC も用いて作業を進めた。この点についても、機材を拡充する等の何らかの対応が必要である。

